

一人で川の傍を歩いている。今は午後3時、「夕食と宴会は4時スタート」と決めたが、皆さんはビールを何本か空けている。オレ、くそ“気まじめ”に「昼間は飲まない」の戒めを守って、散歩に出ました。ここは富山県の馬場島。早月川の上流で地図では、劔岳青少年旅行村となっているが、いつも馬場島と呼んでいる。ゴールデンウィークのこの季節、10年間はここか、隣の片貝川上流にやってくる。毎年、雪の量が違う。今年は真冬に豪雪情報が飛び交っていたが、意外と少ない。2月に金沢に近い富山に雪かき手伝いに行ったが、その時も「去年より少ないねえ」と言っていた。車がいよいよ富山に近づいても雪が無く、馬場島の駐車場にも雪はない。まわりのキャンプ場や炊事場付近に、雪が20センチほど残っているだけ。

それでも散歩に出て10分も山に近づくと、50センチぐらいの雪。間もなく消えて無くなる前の足元の雪は、木屑、枯葉、石ころ、埃で薄黒く汚れている。白い雪に黒の斑点、ぼんやり埃のグレー色は、美しくないというより汚い。ところがその雪の上にやま桜の花びらが舞い落ちてると、俄然色っぽい。ソメイヨシノよりやや赤っぽい花びらが、今が盛りに咲き誇っている。雨が降り、風が吹き、桜吹雪となって雪の上に舞い散る。汚れた雪が妙に生々しい。いいねえ。

先日の展覧会の時“銀葉”という言葉聞いた。銀色の葉・・なるほど、有る。若葉や新芽は若草色ばかりではない。若草色、絵の具で言えば“ライトグリーン”かな、春の山では一番華やかに見えるが、所詮色の一つに過ぎない。針葉樹の濃い緑は、山の中ではまだまだ幅を利かせている。吹き出したばかりの新芽や若葉は、灰色に、黄色、オレンジ、金に銀にと様々だ。曇り空の光を受けて鈍く光る。“侘び寂”の世界だねえと洒落てみる。川の両側には山が迫っている。その山肌にはまだまだ雪が付いている。崖が崩れて土や岩が見えている。そこは雪が土や岩を抱かえて崩れ落ちて、下には雪と岩が積もっている。針葉樹が濃い緑で茂っている。冬の猛吹雪をかいくぐっても平気な顔。その中にとりどころ落葉樹の新芽、若葉が萌えている、それが若草色であったり、金色銀色、黄にオレンジ、白い花をつけた木、そして山の所々に山桜、ピンク色の花をつけた桜だ。劔連峰から流れ出た雪解け水がごうごうと流れている。砂防ダムを流れ落ち、岩の間をかいくぐり、流れている、暴れ狂っている。もし落ちたら、一巻の終わりだね。

フキノトウがたくさん出ていた。晩、汁に入れていただいた。紫色の小菊、カタクリの花、カタクリは葉も綺麗だ。「イソギンチャクに似た花を見つけた」

「ショウジョウバカマですよ、ここにはたくさんありますよ」

新種を見つけたと思ったが、たくさんあるんだって・・。

皆さん花の名前もよく知っている。山の名前は言わずもがな、か。

先日「お前さんが花の話・・」と言われたが、「絵の具とおんなじさ・・」と負け惜しみ。

馬場島は劔岳の麓にあって、劔岳の登山口“早月尾根”がある。劔岳を始め険しい山があり、あちこちに山で死んだ人たちの遭難碑がある。金属でできた物がほとんどで、石に鋏で留められている。「奇跡を祈った。今は雪が降っている」というような、父か母の歌が添えられた物。一度に8人が雪崩で亡くなったと書かれた物。〇〇君と〇〇君へ〇〇大学、と聞いた事のある大学の名前が連なる。碑の上に仏像が飾られた物もある。澤山さんも「隣のザイルで級友が亡くなった」と言っていた。オレも40歳の頃、雪の中に眠っている方を見た。白馬の尾根で前を歩いていた二人が、スキー板2本が立っているの、雪を掘ったら顔が出てきた。後で聞くと、オレより5歳若い彼が、てっぺんよりスキーで降りる途中吹雪に会った。スキー板を立て、ツェルトを張り、ビバークしてそのまま亡くなった、ということだった。10日前に亡くなった彼は生きていたようだった。

碑を見て月日を勘定すると、ほとんどの方がオレと同じような年か、歳上の方が多い。彼らが亡くなったのはほとんどが二十歳代の青春真っ盛り。今は女性もたくさん山に登るが、碑の中に女性の名前は見当たらず無かった。思い出したのがオレが二十歳の頃の東京新宿駅、駅の構内にキスリングがずらっと並んでいた。美術研究所からの帰りにその光景をよく見た。夜行列車を待つ同世代の彼らが眩しく見えた。今回、山から帰る車の中でキスリングの話になった。山岳部出身の山崎さんがキスリングを経験していた。「パッキングが難しいでしょう」「いやいや慣れればあれはあれでいいですよ。両サイドの部屋にたくさん物が入るので、なかなか便利でした。その両サイドにまだカンジキを付けて、余計に横に広がってました」キスリングを知らない人々に一言。今のリュックサックは枕を縦にして担ぐ形ですが、キスリングは枕を横にして担ぐ形。オレが山を始めた四半世紀前にはときどきキスリングを見かけた。元山岳部出身の中年猛者が担いでいた。

さあ帰ろうという朝に晴れた。水滴がいっぱい付いた枝が、新芽が、草が、朝日にあたってキラキラだ。四日目にして初めてのおひさま、雪が残る地面から湯気が上がる。朝日の弱い光にあたって湯気が眩しい色に輝く。水滴の一粒一粒に朝日が入り込みキラリと光る。そのたくさんのキラリ達が光る。少し下流のミニダムを見に行つた。「ダム作りは反対、不自然だから」というオレですが、絵の題材としては好きなのだ。その形、在り方、自然の中のコンクリートの存在が好きなのだ。絵に描きたくなるのだ。反対といいながら好きなのだという矛盾には弁解なしに脱帽。雪解け水の豪流、ひと抱かえぐらいの大きさの石なら、簡単に流しそうな迫力で流れている。泡立ち、オレ曲がり、はじめて、ジャー、ゴオー、ジャー、ゴオーと流れる。100年も200年も前から同じように雪解け水を集めて流れている川に、石を積んで戦ってきた当時の人が目に浮かぶ。この小さい樋ともいえるダムも古い石積みが見られる。ミニダムの水門の中をくぐって、水がどンドンやってくる。「お、これだ」とスケッチをした。水を主役で描いてみた。暴れる水が主役だ。今まで主役だった、石やコンクリートは脇役だ。後の山や空はもう見えない、もう目に入らない。この主役脇役の逆転でどうなるかなあ、楽しみだ、よしこの絵を描いてみよう。

図版はスケッチと写真。「こんな絵ならわざわざ現場に行かなくても・・・」とよく言われるが、だから、わざわざ現場に行くのだ、がはは。

#### 0068 雨の馬場島Ⅲ 100512

いつもハガキ大の大きさのスケッチブックを持ち歩いている。それを広げてスケッチを描いていた。思いついた事を書いていた。地元の人だと思える親子3人が話していた。オレより年上のオヤジさんとおふくろさんと中年の息子さんかな。40歳代のこぶとりの兄ちゃんである息子さんが話しかけてきた。40歳代で“兄ちゃん”はおかしいかも知れませんが、オレの年から考えたら、ま、いいでしょう。

「山・・・」

「雨に降られて登れなかった。やっと晴れたけど今日は帰る日、今から大阪に帰る・・・」

「山菜を取りに来たがちょっと早かった」

「たくさんとれる？」

「毎年いっぱい取る。子どもの頃から連れてこられていっぱい取る」

「うまい・・・」

「オレは採るだけ。自分は食べない。みんなに配る。みんな喜んでくれる」

兄ちゃんが楽しそうに話しかけてくれる。電信柱の仕事をしているようだ。彼の両親も寄ってきた。オヤジさんが70歳代、オフクロさんが60歳代かな。

「〇〇があって、そこに熊がいて、一生懸命食べていたから、そっと、下がった」

いつも馬場島に来ると、熊を見るが、今年は見られなかった。馬場島には警察の常駐派出所があり、その警官があそこにいるよ、こちらにもいるよと教えてくれた。近くの教えられた方を見ると熊が山肌の雪の上を歩いていた。草木の生い茂った中にいるとわからないが、移動の時雪の上を歩いてくれると見つけやすい。この三日間目を凝らして山肌を見ていたが、黒い動く物は見つけられなかった。あの警察官氏が居ないと見つけられない。

「いやあ、そばにいた。5メートルも離れていなかったかな。離れてからすぐに警察に電話した」

と息子さん。

「熊もうまそうに夢中に食べていた。熊のテリトリーだな、あそこは。我々は熊の喰い物をいただくのだから、遠慮しながら採らんとね」

とオヤジさん。

「警察が来て、猟友会が来て、足跡は確認したんだが・・・子どもが危ないからね・・・」

熊が撃たれなくてよかったなと思ったが、インターネットの書き込みを見ると、

「熊の怖さ、恐ろしさを知らない人が、熊を撃つなというが・・・」

熊を殺すことに賛成の方もたくさんおられる。都会人はめったに熊とは遭遇しないが、山に住んでいる人は出会う回数が多く分、衝突の機会も多い。

息子さん

「富山は魚がうまい。最高だ。先日も福岡に行ったが、富山の魚の方がうまい。断然うまい」

お国自慢が出た。いいねえ。日本人もお国自慢をしましょう。その土地の人が、その土地を、風土を、人を、好いて、誉めて、称えても嫌味じゃないよ、微笑ましいよ。遺跡も観光地も娯楽施設もいらぬよ。何も無いのがいい。何も無いからいい。

図版は、どんより曇った雪国の山、手前には積もった雪の間に見え隠れする川、雪解け水を集めてゴーゴーと流れる。

## 0069 “呻吟語” 呂新吾著を読んで 160512

“呻吟語” 呂新吾著・祐木亜子訳を図書館から借りて読んだ。サブタイトルに「心に響く」とある。その後、呻吟（しんぎん）とは、病気で苦しんでいるときなどに絞り出る「うめき声」である。その字のとおり、“呻吟語”は著者である呂新吾（りょしんご）が、自らの人生、生き方に呻吟しながら、書き上げた名著である。「なるほど・・・」と心に響いたので、少し抜粋。

### ●人格者の条件

落ち着いてゆっくりと構えているが、事が起これば迅速に対処する。

危急の時でも、冷静さを失わない。

細かい規律や規範にはこだわらないが、それを軽視するわけではない。

静かで穏やかであるが、冷たくよそよそしくはしない。

率直であるが、不作法ではない。

温かみを感じさせるが、人にこびるわけではない。

明るい性格だが、浮ついたところが無い。

落ち着いているが、暗いわけではない。

毅然としているが、厳格すぎない。

隅々まで目を行き届かせているが、細かいことにまで目くじらを立てない。

機転が利くが、ずる賢い仕打ちはしない。

賢いが、疑い深い見方はしない。

## ●人間の質は徳で決まる

人格者であるほど、道徳を重んじる。

中位の者は、功名を重んじる。

身分の低いものは、読み書きを重んじる。

卑しい者は、金銭を重んじる。

## ●人格が現れる四つの欲望

財産、色慾、名声、地位の四つは品格を考える上での目安となる。これらを求めすぎなければ、目先にとらわれた善行とて、非難するに及ばない。

昔から品格を磨く人は、この四つの怖さを知っているがゆえに、いかに対処すべきかを考えてきた。もっとも看過してはならないことだと考えていたのである。

こんな言葉が続々とある。昔なら読みもしなかったが、読んで「なるほど・・・」と心に響いたが、皆さんはいかがですか。先日近所の中企業の社長の話が、商売の話、売る事の話をしていて、心に響いたので、聞いて下さい。

営業の極意とはお客様から

「お前から、買ってやるぞ」「お前だけから、買う」

と言ってもらうようにする。そう言ってもらうまで頑張る。商売するものは、自分を曝け出だしてお客様と付き合う、お客様と向き合う。

飲食の饗応、袖の下の金銭等は、一過性のもので、すぐに潰れてしまう、これはいけない。

世の中、いっぱい、“おもしろい話” “心に響く話” がころがっている。「なるほど・・・」である。

図版は、寒山拾得を描いた。「カッカッカ ケッケッケ」と書いた。

## 0070 比良山ふらふら 200512

5月の初め、馬場島まで行ったが雨に閉じ込められて、歩けなかった。frustration 欲求不満が溜まっていた。「今日は歩くぞ」と出る前から決め、家を出た。Webで時刻表を調べると、一時間に一本“敦賀”行きの新快速がある。余談だが敦賀へ直行の電車があるとは感激。敦賀まで2時間、2000円で行ける。大阪から日本海方面に抜けるのに電車で行けるとは、便利になったものだ。是非近いうちにふらりと行きたいものだ。若いころ、海水浴のため、車で相乗りして半日もかかったのがうそのよう。

慌てて茨木駅へ7:50→北小松駅9:00→釈迦岳12:00→武奈ヶ岳1:30→金糞峠3:00→比良駅5:00と7時間歩きまわった。満足。とこのようにコースタイムを書くのが、山登りの楽しみで、いやあ、オレも嵌ってますなあ。

前にも書いたが、妙な事を思い出した。馬場島で一緒にテント泊をしたおっさん達3人、前にも言ったが禅僧のごとく黙々と食事の用意。以前からの山仲間でしたが、3人パーティは初めてにもかかわらず、何も決めず、何も言わず、それぞれがそれぞれの用事を始める。食器を出し、並べ、コンロの用意をする人。食材を洗って、切って、並べて、ゴミ袋を用意する人。一人は何をやっているのかなと見ると、うまそうな一品を作っている。玉ねぎを刻んで、かつお節、醤油をかけたもの、サラダのようなものが出来あがっている。鍋をコンロに掛け、野菜を入れ、肉を入れ、豆腐が入った。ビールの栓を抜く。乾杯と飲み干す。穏やかな時間が流れていたのを思い出していた。

歩きながら考えた。穏やかでありたいと思いつつも、人と対立する。

諍う、喧嘩をする。意見が違う、違うことが許せない。自分と違うことが許せない。自分が違うことが許せない。

蔑視、罵り、無視、傷み付ける、そして支配しようとし、掠め取ろうとし、奪い取ろうとする。

自分で自分が理解できない、まして他人は理解できない、まして他人を通じた自分を理解できない。

ましてや自分を通じた自分を理解できない。

いやあ・・いやだねえ・・まだそんな事を言っているとは・・。

今日の結論

「理解しようと努力するのはいいが、理解してはいけない。答えは無いのだから、答えは無い」

Email [xtaka@apricot.ocn.ne.jp](mailto:xtaka@apricot.ocn.ne.jp)

<http://www2.ocn.ne.jp/~xtaka>

図版は比良山、武奈から少し下ったところに、ブナ林がある。お気に入りの処、フラリ歩くには、いいですぞ。

## 0071 皆既日食 220512

朝食のパンを食っていた。朝食はパン派です。飲み物は紅茶派です、とパンの話になると、ながくなるのでこの話は後日しましょう。窓の外を見ていると外が暗くなってきた。「そうだ、日食の日か・・今日は」

太陽を見た。雲がまだらに有る。まだらな雲の間から陽が輝いている。50年以上前の小学校の校庭で、日食を見た覚えがある。先生がガラス片を用意し、ローソクを灯した。ローソクの炎でガラス片を炙った。ガラス片を炎の上に持っていくと、黒い煤が付いた。ガラス片を左右に揺らし、まんべんなく煤を付けたのを思い出した。今、専用の眼鏡もないので、写真のフィルムを出してきて見た。写真のフィルムでは全く見えない。フィルム黒の濃い処、少し薄い処と試したが見えない。これではだめかと思いつつも、フィルムの隙間から、裸眼で見えたというより、その形が網膜に残った。眩しくて見えないが、まだらな雲の間から、光が見えるだけなのに、網膜の残像ははっきりと認識できた。何度も網膜に映った像を確認した。これは幻想なのか本物なのか。ただ皆さんが写した写真とはだいぶ違う。網膜の残像では、月の影が小さい。太陽に食い込んだ月の大きさが小さいけど、くっきりと三日月状の形が残った。いろんな処に載っている、みなさんの撮った写真では月の大きさは太陽の9割以上・・なのに、我が残像は、月の大きさは太陽の5割ぐらいしかなかった。

半世紀前、小学校の校庭で見た日食はと調べるためにWEBを見る。1955年と1958年に日食があった様だが、どちらなのかわからない。WEBの中で、専用の眼鏡で見ないとはいけませんよ、失明しますよと注意喚起。裸眼はもちろん、フィルムも、黒い下敷きも、ダメだそうだ。もうひとつ今日聞いた面白い話が、ピンホール。しっかりした紙に、針できれいな穴をあけると、床に日食の形が出るそうだ。なるほどそれは写真機の話だ。眼球の話だ。それにしても何で日食ができるの、何時できるの、何処で見られるの、次回は、なんて難しい話は理科の先生にお任せしよう。

昨夜、とある展覧会のオープニングパーティに参加した。うまい食事とワインをいただいた。絵の同好会の集まりで、絵が好き、絵を描くのが好き、絵の事が好きと、たくさんの男女がおられた。絵の話になると、オレ、誰とでもその方の絵を前にして、何でもかんでも話せる、楽しい時間、空間だった。さあ記念写真を撮りましょうと、プロの写真家先生。机、椅子をかたづけ、たくさんの方が扇状に並ぶ。写真家先生みんなに配置の指示をしている。「こっちから見て、顔・顔・顔が等分に見えるようにするまでがプロの仕事、皆さんの顔が、表情がそれぞれ生き生き写るように皆さんを配置するのがプロの仕事。後はカメラが勝手に写してくれます」と扇状に広がった皆さんに「引っ込んで、右によって、低くして」ときばき指示。みんなの顔が写真上に見えること、日食が見えること、と“見える”という事をこじつけてみた。

図版は、網膜残像を絵にしてみた。見たのはオレだけかなと思いつつ、なかなかの美しさでした。

## 0072 朝食はパン 270512

パンの話をしたかった。味オンチのオレですが、パンの話がしてみたかった。朝食はいつもパンです。子ども達の教室で「朝食は何を食べましたか」と聞くと、パン食派と米食派が半分ずつぐらいかな。30歳代、40歳代も半分ずつぐらいかな。ところが60歳代、70歳代になるとパン食派が多いように思う。60歳代、70歳代が若い食べ盛りの頃、アメリカ占領軍が持ち込んだアメリカ文化、食習慣からか、パン食、肉食が多いと勝手に思っていますがいかがですか。

難しいことは抜きにして、“パンはうまい” “パンが好きだ”。生涯で一度だけ「このパンはまずい」と思ったのは、30歳代にスペインの田舎町で食べた菓子パン。ポソボソ、パサパサ。本場のヨーロッパのパンがこんなにまずいのかと思ったが、スペインのパン屋さんゴメンね。それ以外のあらゆるパンは味として許せますね。

最近、コンビニやスーパーで売っている大手のパン屋が作るパンもうまくなってきた。しばらく前、“手造りパン”屋さんが街のアチコチにでき“手造りパン”はうまかった。個性的でうまかった。大手のあんパン、ジャムパン、クリームパンに比べたら本当にうまかった。“手造りパン”屋さんはうまい、個性的だ、というのに、大手のパン会社が触発されてか、大手のパンがうまくなって、“手造りパン”の方が、「負けている」ということも多々あるようになった。父ちゃん、母ちゃんの“手造りパン”屋さん頑張らねば。「お前さんの話は次元が低いよ、もっとうまいパン食いなよ、教えてやるよ」の話は歓迎しますよ。

バケットパンはうまい。バケットは造りたて、焼きたてがうまいね。硬く割れるような皮の部分、ふわふわの中身、どちらもうまい。そのままうまい。木の実や乾し果実が入っているのもいい。バケットの皮だけ食べて、中のフワフワを棄てるヤツがいると聞いた。ケンカラン。

オレ、毎朝食らうのは食パンだ。少々古くなっていてもいい。日本の食パンは黴を防ぐ添加物入りだから、と皮肉をこめて、というのは、以前アメリカに何日か居た折、食パンには次の日に黴が付いていた。食パンをトースターで焼いて、様々な野菜を挟んで食べます。「うまい」と紅茶を一杯。

「コーヒー、紅茶、どっち」と聞かれると、紅茶派です。ガラスのポットに紅茶の葉を入れる。ヤカンに水道水を勢いよく入れコンロに掛ける。グラグラ沸騰した湯をポット勢いよく注ぐ。紅茶の葉っぱがポット中でジャンプするのを何分か待つ。ティ・ミルクとミルク・ティの論争があったとか。コップにどちらを先に入れるのか、ということだ。温めたミルクをカップに入れてから、紅茶を入れるというのと、紅茶をカップに入れてから温めたミルクを入れる、このどちらがうまいかという論争だそうだが、ミルクを入れた上から紅茶を注ぐ方がいいと結論が出たと聞いたような。オレも試してみた。ミルクを先に入れたほうがうまいような、ミルクの香りが立つような気がする。だから毎日そうしているかというと、毎日の事だから、どっちが先だか、忘れてしまっているが、毎日「うまい」と飲み干している。

何を食っても「うまい」は幸せである。

「これは食いたくない」「これはいやだ」こんなヤツは個性的だが、どうも・・・である。  
「これが食いたい」「今日はこれを食う」思考、嗜好がはっきりしているのもいいものだ。

安威川河川敷にいた。

奥村君の顔を最近は見えてない。彼が河川敷をよく歩いていた。冬は赤に近いオレンジ色の防寒具を着ていたの、遠くにもすぐにわかった。元デザイナーなので、人とはちょっと違う色を着ていた。奥さんと一緒の時はうれしそうな顔をしていた。病氣療養中なので、体力づくり、体力維持のために毎日歩いていると言っていた。テキスタイルデザイン（服地の布、カーテン、カーペットの柄のデザイン）の仕事が外国に行ってしまうと、仲間の何人かも廃業した。彼は今、会社員で、なかなか風格がある。もうよくなったのかな。

よく出会う人は、身振り手振りや格好で遠くからでも判る。ほとんどの人は知らない人だが、心の中で「やあ、会えましたね、元気ですか」と挨拶。

雨の多い季節だが、今の安威川は水が少ない。その少ない水の中をデカイ鯉がバタバタ暴れている。産卵の時期なのかな。

相変わらず鷺がいる。オレには灰色の鷺がいいね。人慣れしそうで、人嫌い。ぐわあ〜とケタイな鳴声。ピザぐらいの糞尿。餌をとるのが下手なのか、魚をくわえている処を見たことが無いとは言わないが少ない。

「めちゃくちゃだ」と独り言を言いながら、それこそケタイな言葉だなと思った。「めちゃめちゃ」なのか「めちゃくちゃ」なのか・・・帰って辞書を見ると「滅茶苦茶」だ。元来は「滅茶」に、応援の「苦茶」が付いたのか。何故「茶」何だろうね。

どうしても絵が動かなくなった。筆が進まなくなった。「立ち位置を変えてみよう」「考え方を外から内に見よう」「仮説を立てて、別口から攻めてみよう」と以前思いついたことを色々思い出して、切り口を考えた。天地を逆さまにして描いた人もいたようだ。絵を吊るして描いた人もいたようだ。その反対に自分を吊るして描いた人もいた。竿に筆を付けて描いた人、指やら手やらその他の身体の部分を使って描いた人、と皆さんいろいろ試みている。常識を破って、破天荒な事、未曾有（みぞう）なこと・・・と床に二つの絵を隣り合わせに並べて、同じ色を使って描いてみた。その「めちゃくちゃなり」が功を奏して、絵が生き生きしてきた、絵が輝きだしてきた。「カッカッカ」である。不思議な世界である。

筆が止まると気が滅入る。絵を一日見ている、一日睨んでいても、埒が明かない。気が晴れない、楽しくない。この沈んだ気持ち、絵に活力を与えるのか、絵も沈むのか。沈んだ気分が、活力になるわけがないよね。

「カッカッカ」がいい。楽しい時間がいい。生きていくのに、“楽しいのがいい”に決まっているよね。

図版は、安威川河川敷です。淀川ほどはすごくないが、ここも自然いっぱい。

良寛さんは岡山の玉島で禅宗の修行を終えた後、故郷に帰って乞食坊主になった。新潟の名家の跡取り息子として育った。詩文の好きな父親の下に、その名家に、たくさんの文化人が集まっていた。修行を終えて「いざ大僧正になろう」という志を棄てて放浪の旅に出た。家の仕事に熱心でない父のまねをしたのかな・・・とも思っていたが、何故故郷で、何故乞食坊主になったのか、何故大僧正にならなかったのか、やはり不思議だ。

吉本隆明の「良寛」を読んだ。

良寛は、道元に憧れ、道元を目指し、曹洞禅に没頭した。師家に印可を許された。道元は『正法眼蔵』の中で、詩文のようなものに淫しては堕落なのだと、卻（しりぞ）けている。また、老荘の思想も卻けている。

良寛は、道元のようになれないと諦めた。

良寛は、詩文と老荘に淫していった。

これを読んで、なるほど、吉本先生、うまいことをいうなあ、そうかも知れない、そうで無いかも知れない。吉本先生、そんな結論を出さなければいけない人かもしれないが、オレ、そんな解明はどうでもいい。何故故郷で、何故乞食坊主になった、と言っているが、わからなければわからないでいい。むしろわからない方がいい。良寛が禅坊主として生きたのではなく、詩を書いて、字を書いて、乞食をして死んでいった、というのでいい。ただオレは、欲がいっぱいあって、こうはいかない。地位も名誉も金も無いから、よけいに欲しいと・・・「カッカッカ」と笑うしかない・・・。

良寛さんの、字が好きだ。クニャクニャの字。ヘタクソな字。

感激だね。たまらないね。

前回「0073 めちゃくちゃなり」の図版で河川敷の絵を描いたが、その時もう1枚描いていた。その絵が床に落ちていた。その絵をみなさんに見せたかった。以前から『地球の形』という題でいくつかの絵を描いた。小高い処から、海やら川を描く時、真上からのつもりで形を描いてみる。俯瞰図、鳥瞰図というやつです。ヘリコプターで真上に行くなんて事はできないので、写実ではないけれど、こんな形かなと想像しながら、こんな色だろうなと想像しながら、その風景を描いた。自分では『地球の形』と題した。河川の土手があって、土留めのコンクリートブロックが積んであって、歩道があって川がある。歩道にはオレがいる。川には水が流れ、中州があって、草が生い茂り、鳥が舞い、魚が泳ぐ。中州は季節によって、雨によって、形を変える。形が変わると、草の色も形も変わる。水の量も形も変わる。まさに地球の形。

この図版は、上から見た、河川敷の絵です。この発想、『地球の形』もう少し発展させたい。